放射線被ばくとその影響について



あなたが受ける検査の被ばく線量

被ばく：放射線を浴びること
線　量：放射線の量
単　位：**mSv**(ミリシーベルト)



CT 検査
2～30mSv
頭部：2.5mSv
胸部：6.8mSv
腹部：3.8mSv
全身：13mSv

血管造影検査
9～11mSv

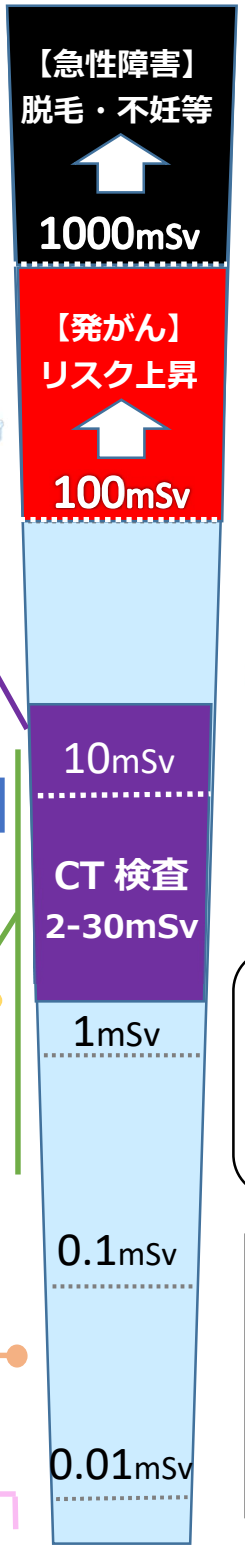
透視検査
4.2～32mSv

核医学検査
0.5～15mSv

マンモグラフィ検査
2mSv 程度

胸部 X 線検査
0.06mSv

歯科撮影検査
0.002～0.01mSv



安心してください！

通常の放射線検査の被ばくで
急性障害は発生しません

100mSv 未満で発がんリスクの上昇は認められません

発がんを心配して検査を受けない事で病気の発見が遅れたりする場合があります



妊娠中の検査で
100mSv 未満では
胎児への影響は認められません

妊娠の可能性がある場合は、主治医にご相談ください。



小児の検査では、小児の放射線に対する感受性は、大人に比べて数倍高いと考えられておりますが、診断に影響が出ない範囲で可能な限り線量を低くして撮影を行なっております。

放射線は、光や電磁波の仲間なので体に残ったり、蓄積していくことはありません。
放射線によって、身体の細胞が損傷をうけることがありますが、**今までの検査の被ばく量を合計する必要はありません。**細胞は常に新陳代謝により入れ替わっているので、**合計すると過大評価になります。**

（1 回の検査で受ける、一般的な線量を記載しています。）

医療の分野では 100 年以上前から放射線が使われており、病気の診断あるいは治療に大きく役立っています。ただし、放射線は不適切に多く浴びると皮膚の紅斑、脱毛、不妊あるいは発がんなどの身体に悪影響があることも知られています。そのため、**医療現場では医師が患者さんの状態をよくみた上で、診断あるいは治療に必要と判断した場合にのみ放射線を利用しています。また、検査に用いる放射線の量は、身体に悪影響が出る量と比べるとずっと少なく、さらに担当の診療放射線技師がより少ない適切な量の放射線で検査を行うように努めています。**

公立置賜総合病院　医療放射線安全管理委員会